

を俗的(ぞくてき)なもの、稀(まれ)には善(よ)いものも有りませんが、中には殆(ほとん)んど口(くち)にするも憚(はば)かる様(よう)なのが澤山(たくさん)ありまして、之(これ)もだん／＼改良(かいり)しなければならぬと思(おも)ひますが、此等(これら)の人情歌(にんじやうか)を大低(だいてい)の日本(にっぽん)の家庭(かてい)に於(お)ては平氣(へいき)で子女(しやうに)と一所(いっしょ)に諷(ふ)んで居(ゐ)るのは、寧ろ驚(おどろ)くべきではありせんか特に母親(はは)等(ら)が、子供(こども)に向(む)つて諷(ふ)え諷(ふ)えといつて切(き)りに勸(すす)めて居(ゐ)る事も見(み)た事(こと)がありまして、私(わたし)の考(かん)には一汎(いつぱん)の家庭(かてい)に於(お)て以(い)謂(わい)學校(がく)唱歌(てい)の如(ごと)く者(もの)を可成(なるべ)く諷(ふ)く様(よう)にして日々(ひび)時間(じかん)を定(さ)めて家内(かない)合唱(ごう)等(ら)も致(いた)したならば、一層(いっそう)心身(しんしん)を爽(すわ)快(かい)にし審美(しんび)的感情(てきかん)を養成(ようせい)し、恰(あた)かも謠(うた)ふ様(よう)な心持(こころもち)が致(いた)しまして、子供(こども)の教育(けいよう)上に取(と)りましても、又(また)一家(いっか)の平和(へいわ)團圓(だんげん)の上(うへ)に於(お)きましても、此上(こゝろへ)もない善(よ)い事(こと)と思(おも)ひます。

(六)親切(しんせつ)といふ事(こと)。終(お)りに望(のぞ)んで今(いま)一つ親切(しんせつ)と申(もう)

事(こと)を簡單(かんたん)に申(まう)しますが、皆(みな)さんは、鼻(はな)を垂(た)して居(ゐ)る子供(こども)に向(む)つて、鼻(はな)をかめと云(い)うて自(じ)分(ぶん)でかませるのと、又(また)此方(こゝろ)から鼻(はな)をかんでやるのと、何(なん)れが親切(しんせつ)だと思(おも)ひますか、私(わたし)は其(その)子供(こども)の爲(ため)には、鼻(はな)をかんでやるのは、却(か)つて不親切(ふしんせつ)で、自(じ)分(ぶん)で鼻(はな)をかませるのが、真(ま)に親切(しんせつ)である／＼と思(おも)ひます、是(こ)れは只(ただ)一例(いちれい)でござりますが、些細(さいさい)の事(こと)でも、子供(こども)の爲(ため)には、甚(はな)だしい影(えい)響(きやう)を及(およ)ぼす者(もの)であります、から、余程(よほど)氣(き)をつけねばなりません、親切(しんせつ)の積(つみ)りで世話(せわ)をや(や)り過ぎ(すぎ)ることが、却(か)つて後々(のちのち)子供(こども)に思(おも)はしからぬ性質(せいしやう)を興(おこ)へることになつて、大變(たいへん)な不親切(ふしんせつ)となること、澤山(たくさん)御座(ござ)います。

傳染病

醫學士 長瀬復三郎

(5) 假痘

之は折り／＼あります、眞痘に比して發疹少く、全身の症状もかろく経過も善良です。全身の熱發、食欲の欠損などからはじまりまして、全身に順序なく發疹し直に水ぶくれになり中央くぼみ五六日目より化膿をはじめ、二三週間の内に痂皮を生じて終る。合併症はありません。

(6) 水痘

幼児のみにある傳染病で、其病毒の原因はまだ分りません。初には通例の病氣のやうに何か徴候があるか、又は全身に順序なく突然豌豆大の紅色の斑點でき、中央に針のささきのやうな水泡でき、追々大きくなり、まはりに紅色を帯び遂に胞中の液も多くなり、水泡は三日目位より褐色になり、八日乃至二週間位より斑痕なくしてなほります。

以上申した發疹性傳染病の内最も注意すべきは麻疹、猩紅熱、天然痘の三です。

(7) 百日咳

爰に呼吸器病であつて傳染し、世人は割合に恐を抱かず爲に餘病に由て多くの子供を倒す病がわります、即ち百日咳(癆咳、疫咳)です。之は傳染病の一で、二年乃至六年の子を侵します。喉頭氣管のカタル症状で、一種特別のせきをします。此病は大人にはありません。又幼児でも一度かゝれば通例二度とはかゝらぬものです。通例二年以上ですが時には二年以内でもかゝる事があります。もし一年未滿の兒が此病に侵された時には、ジフテリア又は腦膜炎のごとく最も恐るべきものです。病原病毒に付ては今日一定した學説がわかりません。潜伏期は一週間、次はカタル期で、咳嗽起

り、まだ百日咳であるといふことはしかと分らず、只氣管支カタルの咳嗽よりも多く且つ發作性に出るのであります。そうしてせく時には食物をもどします。さて十日から十四日もたてば癒咳期となります。幼兒の泣く時、物を嚥下する時、精神感動のあつた時に發作してせきます。其咳嗽の有様を申しますと、最初に先づ不安の狀を呈し、喉頭に何か刺戟物のあるやうにせきはじめ、呼吸のみ連出し、顔色赤くなり、涙を出し、唇は紫色を帯び、ひどいのは大小便を洩らし所々の粘膜の出血、鼻血等を起し、さて三四分の後永き吸氣をなし、漸く安靜になる。かやうな發作が、ひどいのは一晝夜に五十回位通例三十回位又二十回十四回のもあり。かくて發病後だんく日を經るに従て、發作の數少なく且つ輕くなり、八週乃至十週にて治る。即ち

カタル期、癒咳期、輕快期を經るものです。通常全經過の内發熱することはありませんが、時として突然發熱し、又はあまりはげしくせく爲にカタル性肺炎、腦膜炎を起し、又は下痢のつゞいた爲に大に身体衰弱し、遂に結核病を起すことが屢々あります。そうして新鮮な空氣中に居るほど恢復はやく、下等社會の不潔な空氣の處に居るなど恢復がおそく、又合併症もおこりやすい。

一家に此患者あるときには、之に氣が付いて他の健全なる兒を隔離せうと思ふ頃には、もうとくに健全の兒にも傳染してゐるのであります。さうして幼稚園、小學校、親族、知人等幼兒の交通は傳染の媒となりません。東京には二三年以來、終年此患者の絶えたとがあまりありません。之を防ぐには咳嗽のである兒にはよく注意してはやく健全な兒とはなすやう

に氣をつけるのが大切です。

此病の發作は夜にゐるのが多いです。故に晝は少しも變らず遊び、從て大人もさほど心配せず夜になりて發病するものですからよく、氣をつけなければなりません。

今
昔いろは料理

石井泰次郎

(九)

今度の四の仕方は昔の仕方を記せる物なり

たけのこの汁搾へかた

竹の子の根と、穂先とを切て、皮をむきささり、切方は好み次第小さくも大きくとも小口切にも、はす切にもして、ざつと油にていため、露と焼豆腐とはじき豆などあしらひて、汁にも仕立、又すひ

ものにも仕立るなり、吸口 木のめ。

田にし用ひかた

田螺は、あらひて、煮しめて用ふ、又干大根などつけあはせて、木の目あへにしてよし。

た、みいはし用ひかた

た、みいはしとは、白すといふ魚のはしたるにて、醬油をふりかけて、あみの上にてやきて用ふべし、又た、みいはしを水に二日ほどつけかけば生の色にもどり、ひとつひとはなる、なり、是を白魚の代に獨活など入て吸物にして用ふべし。

吸口、淺草のりを揉てふりれくなり。

たいのかさはり搾へかた

鯛に鹽をやきつけねき、鯛をうすく切身にして入るべし、さて味淋にても酒にてもひた／＼に入て煮るべし、さて酒氣ののきたる時に、米のとき水